

## チュニジア：不安定な政治情勢の中で 迎えたコロナ禍



在チュニジア日仏通訳・翻訳家 新村 枝美子

私がチュニスに住み始めてから早27年。2011年1月におきたジャスミン革命までのチュニジアは言論の自由のない一党独裁政権下の社会であったが、経済面では順調に発展し、一般市民の生活レベルは向上していた。しかし、失業率の上昇、権力保持者による貧困層への傲慢な行為などから不満は募り「アラブの春」到来となった。その後、多くの政党が形成され、革命から3年後に新憲法が成立。新たな憲法のもとで2回の大統領選挙、同様に2回の国会議員選挙が実現されるも政治面では不安定な状態が続いている。

昨年10月の国会議員選挙のあと様々な政党間での交渉が決裂し、最終的にはサイエド新大統領が任命したファフファーフ首相のもと新内閣が組成、信任されたのが今年の2月27日であった。このように政府の指導者らがいつ誰に変わるのか分からない状況の中、チュニジアは新型コロナウイルスに対峙し始めたのであった。



チュニス新市街（2020年8月，筆者撮影）

世界中の新型コロナウイルス感染者増加を受け、チュニジア政府は2月末にまず空港での体温検査などの水際対策を強化。3月2日チュニジアで初の感染者が発生。3月10日イタリアからの航空便数減少に始まり、最終的には3月18日貨物、退避便を除いた国境封鎖に踏み切った。また同日夜間の外出が禁止になり、3月22日に日中も含めた外出禁止措置が取られ、生活に必要な不可欠な活動以外での外出はできなくなった。このロックダウンは約1ヵ月半続くことになる。

この期間中、多くの国と同様にチュニジア政府は手探り状態で様々な措置を発表。ロックダウンにより収入がなくなった貧困層への現金給付、経済的に痛手を負っている企業への援助策、また外出規制を遵守しない国民に対する罰金の導入、県間移動の禁止などである。

国民の多くにより規制はおおよそ守られていた。これは規則遵守の考えからというより、新型コロナウイルスに対する恐怖によると思われる。ロックダウン開始前には物資不足を懸念しスーパーなどに多くの人々が押し寄せ、かえって感染リスクを高くしているような場面も見られたが、ロックダウン中はスーパーも入店規制を行い特に問題なく人々は指示に従っていた。

出勤できない以外の生活上の支障としては、家庭でパンなどを作る人が増えたせいでの小麦粉不足、また感染を恐れ多くの個人開業医が診療を停止、民間総合病院でも外来サービスを停止してしまっただけが多々見られた。このため、ロックダウン中はコロナ感染以外の病気にもならないよう気を付ける必要があった。私の夫はロックダウン前に腎臓結石が見つかり直ぐに結石破砕治療を受ける予定であったが、外部からのコロナ感染を危惧した病院が結石破砕センターを閉鎖してしまっただけであった。そのセンターが再開する気配は全くなく、担当医にも連絡が取れなくなった。他に治療を受けられる病院がないか様々な所に電話をし、やっと数週間後にチュニスで同治療を行う病院が見つかり、新しい医師のもとで治療を受けることができた。その頃の病院は皆がマスクをしており、入り口できちんと消毒を促していた。

感染者数が増大する前に国境封鎖やロックダウンに踏み切ったおかげか、外出規制の段階的緩和を始めた5月4日時点での累積感染者数は1,022名。6月8日には夜間外出禁止も解除され、ほとんどの面で生活は通常に戻った。5月21日時点での陽性者数が100名を割り、新規感染者は退避便の帰国者だけであったこともあり、人々は新型コロナウイルスに対する恐怖をほとんど忘れたようである。スーパーでマスクをしているのは少数派となり、銀行や行政機関では要マスク着用と大きく張り出されているがマスクをしない人が多くなり、マスク不着用で特に注意されることもなくなった。

レストラン、バーなどは入り口で体温を確認し、従業員がマスクを着用しているところもあれば、入り口での手の消毒以外何の措置もとっていない店も多い。若者たちは夜クラ

ブなどに集り、例年と変わらず楽しんでいる。



チュニスのスーク入り口（2020年8月，筆者撮影）



チュニス中央市場（2020年8月，筆者撮影）

残る大きな規制は国境封鎖であった。チュニジアは観光立国であり、長引く国境封鎖により観光業界は大きな痛手を受けた。新型コロナウイルス対策の観点からは国境を封鎖しておいた方が良いのは明らかだが、チュニジア経済、観光業界を少しでも助けるために国境再開は避けられなかったのであろう。そこで6月27日に国境が再開された。世界の国々をグリーン、オレンジ、レッドに分け、グリーンの国からは自由にチュニジアに入れるようになった。このリストは定期的に見直されており、日本は最初グリーン国であったが、

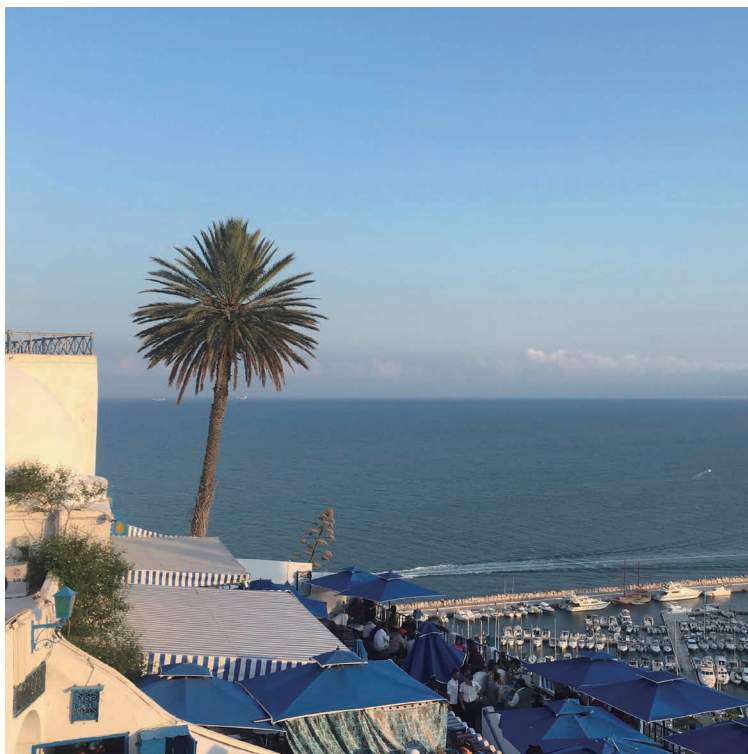
オレンジを経て、現在はレッド国に分類されている。

国境を一部開放したことで当然のように徐々に感染者が増え、7月24日には2ヵ月ぶりに市中感染者が発生。このようにコロナ状況が悪化を見せ始めてきた時期に、またしてもチュニジアは政治面での安定を欠くことになる。利益相反問題で追及されたファフファーフ首相が7月15日に辞任。辞任時に与党イスラム政党ナフダ党の大臣らも解任。7月25日にサイエド大統領が新しくメシシ首相を任命し、組閣を命じた。

その7月末には国内の新規感染者が海外から入国の新規感染者数を徐々に上回るようになった。8月後半には国境再開後に陽性と判明した人の数がチュニジアの累積感染者数の半数以上を占めるようになった。陽性患者数は増え続けており、感染者数増加を抑えるため、8月26日からはグリーンリストの国でもPCR検査の陰性結果がないと入国できなくなった。マスク着用の義務化も強化され、一部イベント等も禁止となった。

しかし、感染者数の増加を知ってはいても、一般の人々は新型コロナウイルスに対する恐怖に麻痺してしまったためか、ロックダウン時のように消毒に気を使い、ソーシャルディスタンスをとる事を忘れてしまったようである。

チュニスやチュニス近郊は飲食店、海水浴場など例年の夏とほとんど変わらないような賑わいを見せている。しかし、通常は外国人観光客でにぎわう海岸沿いのリゾート地は大変閑散としている。閉まっているホテルも多く、本来なら土産屋でにぎわう目抜き通りもほとんどの店舗が閉まったままで大変寂しく感じられた。国境を開けてはみたが外国からの観光客は多く訪れなかったようである。



夏のシディブサイド (2019年8月, 筆者撮影)



買い物客でにぎわうチュニス目抜き通り（2020年8月，筆者撮影）

私はチュニスを拠点とし、アフリカ仏語圏で日仏通訳を生業としている。3月初頭の近隣国への出張、チュニスでの業務を最後に仕事は途絶えた。予定されていた業務はすべてキャンセルとなった。日本から出張できない現在、当然のことである。今後この新型コロナウイルスがいつまで猛威を振るうのか全く分からないが、少なくともあと1年は通訳の仕事がないのではではないか。時々頼まれていた翻訳にしても同様だ。国際協力関連のセミナー資料翻訳がメインであり、セミナーなどの活動自体が現在全く行われていないため翻訳作業も発生しない。海外でプロジェクトを遂行している企業も同じであろうが、二国間、多国間の協力関係、人々が国境を跨いで移動することで成り立つ私のような職業の人に新型コロナウイルスは経済的に非常に大きな痛手を与えている。

しかし、最近になり仕事面では少し明かりが見えてきた。日本人がチュニジアに出張することはまだ出来ないが、リモートでの現地調査などが始まるようである。このような業務に協力していきたいものだ。また日本からの郵便物送付も一時停止されていたが、8月半ばに全て再開され少しほっとしたところである。

チュニジアでの感染者数が最近増加しているが近隣諸国と比較するとまだかなり少ない。9月に入り新内閣のもとで政府が稼働し始めた。今後も適切な判断で新型コロナウイルス対策、またコロナ禍で弱った経済への支援対策などを打ち出して欲しいものだ。